## 「青い夜」

1972年、油彩、カンバス
45・5㌢×37・9㌢

### 難波田龍起（1905～97年）

難波田龍起は北海道旭川市に生まれ、家族とともに上京。1923年早稲田第一高等学校入学の年、関東大震災直後の夜警当番で高村光太郎と出会い、芸術の道に導かれます。高村の勧めで太平洋画研究所に学び、川島理一郎が主宰する絵画研究会の金曜会に入りました。また鶴岡政男、松本竣介らとも交友し、竣介はやや年長の難波田を兄のように慕いました。

29年第4回国画展に初入選。37年自由美術協会の結成当初から、59年まで出品します。戦後は抽象表現へと向かい、50年代後半から交錯する線のシリーズを開始、アンフォルメルの影響を独自に消化しました。本作は2人の息子・史男と紀男を失う直前の作品、線の表現から形象の表現へと回帰する時期の一点です。

大川美術館企画展「大川栄二生誕100年記念　コレクターの目」から

《名画の扉》

難波田は、若くして友人竣介を、70歳前後にして息子2人を亡くす不幸に見舞われました。竣介を中心とするコレクションの当館開館を祝して自身の作品を寄贈、また本展第2章の「画家難波田史男」の作品も寄贈してくださいました。（大谷）